2015 年　早稲田大学　教育学部　英語解答例

Ⅰ　１－a　　２－c　　３－d　　４－d　　５－e　　６－b　　７－b
　　８－e (that do make <u>it</u> to)　　９－c　　10－e

Ⅱ(A)　１－a　　２－c　　３－e　　４－e　　５－a　　６－d
　　７－b　　８－e　　９－b
　(B)　d

Ⅲ　１－e　　２－c　　３－b　　４－b　　５－d　　６－a
　　７－c　　８－a　　９－d　　10－d

Ⅳ　１－b　　２－c　　３－d　　４－e (it was not <u>until</u> the)　　５－c
　　６－a　　７－a　　８－b　　９－c　　10－e

Ⅴ　１－d　　２－d　　３－d　　４－b　　５－c　　６－d
　　７－c　　８－c　　９－b　　10－a

※コメント　長文問題が５題と、会話問題が１題で例年通りの出題形式。英文内容が自然科学的なものを含むことも毎年の傾向である。語彙・イディオムのレベルが比較的高い。make it to ～＝「～に到達する」といった用法を知っている受験生はあまり多くないのではないかと考えられる。

2015 年　早稲田大学　教育学部　国語解答例

（一）
［出典］
大貫隆史・河野真太郎・川端康雄編『文化と社会を読む　批評キーワード辞典』「Ⅶ　文化と表現　文化」の一節。問題とするに当たって、前後の文章がカットされている。また、一部、語句や短い文の省略、語句の異同がある。
［解答］
問一　エ　　問二　外側　　問三　ウ　　問四　エ　　問五　イ　　問六　エ
問七　ア　　問八　オ

（二）
［出典］
小関和弘『近代日本の社会と交通　１４　鉄道の文学誌』「第３章　車室内の〈風景〉その二　第二節　窓の外」の一節。問題とするに当たって前の文章がカットされている。また、途中、文の省略もある。

［解答］
問九　甲：復員　　乙：挙措　　問十　オ　　問十一　オ　　問十二　自分の顔
問十三　志賀直哉　　問十四　ア　　問十五　エ　　問十六　ウ

（三）
［出典］
甲：『とはずがたり』
乙：『新撰万葉集』（［和歌］は紀友則の歌で『古今和歌集』にもとられている。）
［解答］
甲
問十七　如月　　問十八　イ　　問十九　ア　　問二十　（遊義門院の）御幸
問二十一　イ　　問二十二　オ　　問二十三　Ⅰ　エ　Ⅱ　イ　　問二十四　ウ
問二十五　都の御所へたづね申すべし　　問二十六　ウ
乙
問二十七　ばんじこころにのみて　　問二十八　イ　　問二十九　ア　　問三十　エ
問三十一　ウ　　問三十二　オ

［講評］
（一）（二）の現代文二題と（三）が古漢融合問題という形式は、昨年度と同じ。ただし、昨年度の（二）が随筆的な文章であったのに対し、今年度は評論が出題された。
（一）の評論は、実は、もとの文章は論旨が明快な文章なのだが、問題文の前後のまとまった分量の文章をカットしてしまったため、全体の意図が曖昧になってしまい、作者の主張もややとりにくくなってしまっている。ちなみに、省略されたうちの前の部分は、「文化」についての定義と問題提起が、後の部分には文章全体のまとめが書かれていた。問一や問八の答えが絞りにくく感じるのもこの省略のためである。問三は評論用語としての「自意識」の意味がわかるかどうかが問われている。文中では「自意識」という語は使われていない分、やや難しかったかもしれない。問五は、ウとの比較が難しいが、「自己」の「内側」と「外側」の関係がウの選択肢では、十分に説明できていない。
（二）の評論は、文学作品の引用が多い文章で、引用と作者の説明とを対応させで読解することが求められている。問十六はそのことを問う問題になっている。ただし、，作者の主張を把握するのはそれほど難しくない。設問では、問十一が、イかオかで迷う問題になっている。どちらの選択肢も一長一短があり、答えを絞り込むのが難しい。傍線部の「……押しやりながら突っ走る」という表現や、前の行の「抽象的存在となり果てている」といった表現から読み取れる、ネガティブな評価を明確に表しているオを答えとする。問十二は、文中から抜き出すのではなく、「考えて書く」問題である点を見落とさないこと。
（三）甲の古文は、かつて後深草院に仕え、宮廷生活を送っていた作者が、出家後、久かたぶりに、遊義門院に偶然出会うという中心の話題がつかめるかどうかがポイントとなる。問十九、問二十、問二十一は直接この内容に関わることが問題とされている。問

二十二は敬語法に関する問題。傍線部７が自敬表現（尊大表現）になっている点がやや難しい。
（三）乙の「古漢癒合問題」は和歌と漢詩の組み合わせで、問三十二では甲の文章との対応も問われている。基本的な知識や解法が身についていれば、十分対応できる問題である。